

(表6)(表7)。

以上の結果より次の如く結論しうる。

無症候性細菌尿の集団検尿は幼稚園または小学校低学年にて行うことが望ましい。

理由としては発生頻度は1.5～2.0%であるがIVP変化を示すものが少ない。治療によって極めて起因菌の

陰性化を得、再発率が低い。腎尿路系の奇型の発見率が高いなどである。

無症候性細菌尿は高学年でIVP変化を伴うものが多いことなどから積極的な治療を行い起因菌陰性化が慢性腎盂炎の発生を予防しうるものと推察される。

尿路感染症研究報告

都立清瀬小児病院腎内科	伊 藤	拓
同 泌尿器科	川 村	猛
	長谷川	昭
	星 長	清 隆
	木 村	太 紀
同 腎内科	長谷川	理
	青 才	文 江
	中 原	千恵子

1. 小児再発性尿路感染症の再発要因——とくに潜在性神経因性膀胱のスクリーニングに関する研究

排尿中弛緩すべき膀胱外括約筋の攣縮をきたし尿道抵抗の増大から残尿を招き尿路感染の再発要因となる事例がしばしば経験される。このいわゆる Detrusor-Sphincter Dyssynergia をスクリーニングする方法として排尿時を含む外括約筋 EMG, 平均尿流量, 残尿量を検討することにより再発要因を潜在性神経因性因子は勿論, 排尿習慣不全因子も判別可能となり再発症例の治療にきわめて有意義であった。

再発性膀胱炎 43 例中 15 例は潜在性神経因性膀胱型, 15 例は排尿習慣不全型であった。前者には尿道拡張, 外括約筋切断, 後者では正しい排尿指導することにより再発を高率に阻止できる。一方原発性膀胱尿管逆流症例の中にも上記 2 型は高率 (15/31 例) に存在することが確認された。

2. 小児に於ける黄色肉芽腫性腎盂腎炎の経験

昭和 45 年以来 2 例の同症例を経験した。5 才 6 ヶ月及び 2 才 8 ヶ月の何れも男児で双方とも静脈性腎盂造影

上 non-visualizing であり, 腎摘出を行い, 組織学的に確認された。小児での本症は稀で欧米では 70 余例, 本邦では 2 例が報告されているにすぎない。両報告例とも腎組織より *Proteus* が培養された。

3. 小児無症候性尿路感染症の臨床的検討

本年度厚生省尿路感染症研究班会議で小児無症候性尿路感染症の臨床的意義について 2 回にわたり報告しており, その内容をまとめて要旨を述べる。

対象及び検討方法

昭和 51 年～54 年の 4 年間に本院小児科, 泌尿器科を受診した無症候性尿路感染症 21 症例と昭和 53 年～54 年の 2 年間に小児科を受診した有症候性尿路感染症 41 症例について起因菌, レ線検査所見, 予後について比較検討を行った。

結 果

1) 起因菌

両群における尿細菌の種類は表 1 の如くであり, 両群共 *E. Coli* が半数以上で, 以下, *Klebsiella*, *Proteus* の順であるが, symptomatic infection で *E. Coli* が

表 1 Causative Agents of Urinary Tract Infection

	Asymptomatic	infection	Symptomatic	infection
E. coli	11	52.4%	29	70.7%
Klebsiella	5	23.8%	8	19.5%
Proteus	4	19.0%	2	4.9%
Enterobacter	1	4.8%	1	2.4%
Pseudomonas	1	4.8%	0	0 %
	22		40	

表 2 Prognosis of UTI

	Asymptomatic		Symptomatic	
Follow-up period (mean)	15.8mos		11.6mos	
surgical Tx	1/21	4.8%	5/41	12.2%
Recurrence	3/21	14.3%	10/41	24.4%

70.7%と asymptomatic infection の 52.4% より高頻度である事が注目された。

混合感染は両群共に 1 例のみであった。

2) レ線検索

IVP 及び VCG 所見では, asymptomatic UTI では上部尿路の異常を認めるもの 16 例中 10 例 62.5%, 下部尿路の異常は 1 例 6.3%, 計 11 例 68.8% であり, symptomatic UTI では各々 36 例中 25 例, 69.4%, 2 例 5.6%, 計 27 例, 75.0% であり, 両群に有意の差を認めていない。

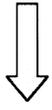
3) 予 後

asymptomatic UTI 21 例の平均 follow-up 15.8ヶ月, symptomatic UTI 41 例の平均 follow-up 11.6ヶ月において表 2 の如く手術適応例は各々 4.8%, 12.2%, 再

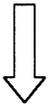
発例は各々 14.3%, 24.4% であり後者に手術適応症例及び再発の多い傾向が見られた。

考 按

asymptomatic UTI の病的意義についてはなお議論のあるところと思われるが, 今回私共の asymptomatic 及び symptomatic UTI の比較検討結果では symptomatic UTI において手術適応症例の頻度が高く, 再発率も高い傾向が認められた。しかしレ線検索においては両群共に高率に且つ同頻度に尿路系の異常を伴っており, 長期予後考えた場合, asymptomatic UTI についてもレ線検索は routine ex. として行い, 治療方針はこれらの検索の結果, 即ち基礎疾患の程度によって考えるべきと思われた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 小児再発性尿路感染症の再発要因—とくに潜在性神経因性膀胱のスクリーニングに関する研究
2. 小児に於ける黄色肉芽腫性腎盂腎炎の経験
3. 小児無症候性尿路感染症の臨床的検討